

## Peace Research in Action : 日常を平和学化する空間的实践の探求

猪瀬 浩平  
(PRIME 主任)

### プロジェクトの概要

平和学の学際的研究実践で得られた知見を、如何に多くの人々にアクセス可能にするのか、そのための探求を行うのがこのプロジェクトの目的である。

アンリ・ルフェーブルによれば、「空間的实践」とは、「日常実践の反復の中に新しい差異を発見する」こと、「日常生活の実践的な変革」の始点「身体や時間や空間をわがものとして領有する試み」、「日常的なるものの破壊行為であり、日常生活における祭りの再建」と定義される。

この定義を念頭に置きながら、大学内外の都市空間で、平和的空間を構築する方法を実践的に考えるワークショップやカフェ形式の座談会を開催する。これらの空間的实践によって、平和学の裾野を広げ、従来関心のなかった多くの人々が日常的に平和学に接することを企てる。

本年度は以下の活動を行った。

### 活動報告

- ①「ウォールアート・フェスティバル・イン・ニランジャナスクール2010 "HAMARA TYOUHAR!"」(講師:浅井祐介+おおくにあき+浜尾和徳 2010年5月13日白金

キャンパス)

- ② Wall Art Festival in Tokyo (講師: Wall Art Project + 浅井祐介 + 遠藤一郎 2010年12月6日戸塚・善了寺)

ウォールアートプロジェクトが、2010年2月にインド・ビハール州で開催したプロジェクトの活動報告と、アートと社会の関係について議論を行った。

このプロジェクトは大学生ボランティアグループが貧困地域とされる場所に開校した小学校と、開校以降も関係を継続・発展させるための方法として企画された。日本とインドの作家が教室の壁に壁画を描き、子供たちは数か月教室で学習した。その後、壁画は消され、また元の教室に戻った。プロジェクトのコーディネーターはプロジェクト前後の長い期間現地に滞在し、地域の様々なアクターとのネットワーク構築を行った。単に美しいものを見せるのではなく、その丁寧な関係づくりの過程によって、学校という管理空間に、アートという非日常の創造が接続され、ビハール州の住民と、日本社会のアーティストや住民との間に、今までなかった関係が生み出された。

5月に白金キャンパス、12月には戸塚の善了寺でイベントを開催した。善了寺では、2011年2月に開催する Wall Art Festival 2011 (WAF 2011) のため、それぞれ個人の旗づくりを行うワークショップが行われた。つくられた50以上の旗は、

WAF 2011で展示された。

## 2. OCA (2010年8月24日大阪市立大学都市研究プラザ西成プラザ)

大阪市 + 日本ボランティア学会 + NPO 法人「こえとことばとこころの部屋」と共同で開催した。

大阪釜ヶ崎を会場とした。オープニングとして釜ヶ崎で長年日雇い労働に携わってきた人々によって結成された釜凹バンドの演奏と、釜ヶ崎に3日間滞在した明治学院大学生による詩の朗読が行われた。シンポジウム第一部は建築家の家成俊勝さん、埼玉の障害者運動団体「わらじの会」の吉田弘一さんと吉田昌弘さん、釜ヶ崎支援機構の山田稔さんによる、それぞれの現場における多様な関係づくりの報告。第二部は、釜ヶ崎で活動するアートNPO「こえとことばとこころの部屋」の上田假奈代さんと、釜凹バンドメンバーで大工の井上登さんによる活動報告。その後、生きることのしんどさが幾重にも折り重なった地域である釜ヶ崎において、アートや表現にどのような役割があるのか活発な議論がなされた。

なお家成俊勝さんは、6月に白金キャンパス、10月に横浜キャンパスで、空間構築ワークショップ「Inclusive Architecture Workshop」を実施、その後、現代の都市において、如何に集団の創造性が発揮され得るのか、意見交換を行った。

## 3. 「自らと向き合い・自らを開くために—アリヤラトネ博士との対話集会」(講師:A.T. アリヤラトネ博士 2010年10月16日)

日本ボランティア学会と共同開催した。

1958年にスリランカで始まったサルボダヤ・シュラマダーナ運動の創始者であるアリヤラトネ博士を迎えて、対話集会を行った。サルボダヤ運動とは「シュラマダーナ=労働の分かち合い」を通して「サルボダヤ=全ての人の目覚め」を促し、

人びとが心と物質のバランスのとれた豊かな生活(貧困もなく、行き過ぎた浪費もない社会)をおくることができるようなコミュニティづくりである。老若男女、さまざまな階層の人たちが等しく参加し協働していくことを通じて、村づくり・社会づくりを行っている。

今回はアリヤラトネ博士の講演会という形ではなく、参加者との対話を重視し、カフェ形式で開催された。当日は学生など若者が多く参加し、物質的には豊かでありながら格差が広がり、人びとが生きづらさ・孤独を抱えながら暮らしている日本社会の現状について意見交換がなされ、サルボダヤ運動が示唆するものについて検討された。

## 4. Go West EXPO 2011 (2011年2月11日)

明治学院大学共通科目「ボランティア実習」101の一環として実施しているスタディツアー「Go West」の成果報告会を、千代田区の廃校を利用したアートスペース「アーツ千代田3331」で実施した。Go Westは、埼玉県の見沼田んぼ、郡上八幡、奈良のたんばぼの家、大阪釜ヶ崎を訪問する2週間余りの旅である。

Go West EXPOは有志学生や、学外関係者を中心にプログラムが準備された。訪問先で出会った人とその地域の絆を詩として作品化し、朗読する「こころのたねとして」、障害の有無や、年齢、居住地を超えた様々な人が、即興で演劇を行うワークショップ、参加者同士がペアになりお互いの旅の記録を語り、聞き手がその話を詩として表現するワークショップ、新宿や上野の表面ではなく、裏側を歩くツアーなどが企画された。

当日は訪問先の人々をはじめ、有志学生の関係者(含む家族)、アーツ千代田3331の訪問客など、様々な人が集まった。授業・教育成果の公開手法は、今後の平和研の活動においても重要な視点を与えていると考える。

## 今後の課題

時代は混乱を極め、今まで個人と個人を結び付けていた絆は少しずつ崩壊している。だれしもが生きることのしんどさを少なからず抱えている。

私たちが創造しなければならないのは、直面する「しんどさ」の表層的な名付けを超えて、共同で生み出す言葉であり、表現であろう。

2011年度、PRIME 内部での議論を活発に行いながら、これまでの活動の成果を平和学の知見として整理し、公開する作業を行っていく。特に

アートの公共性や、それが持つ排除の側面について留意する。同時に、現代の社会において持続可能で、自律的な生存領域を創造する際の、アートが果たす役割について検討を行う。

## 研究成果

猪瀬浩平2010「Go West : 2008 - 2009年度明治学院大学共通科目「ボランティア実習101」の記録」『日本ボランティア学会2009年度学会誌』 pp.74-84